

地球の裏側にあった“日本”

¡Hola a todos! ¿Cómo están?

みなさん、こんにちは！

私はJICA海外協力隊としてパラグアイに派遣され、野菜栽培隊員として活動している会田安那です。

今回は、パラグアイで見つけた日本とのつながりについて紹介します。

実は、パラグアイには日本と深い歴史的なつながりがあります。

パラグアイは、南米の中でも日系移民・日系人が多く暮らす国の一つです。

パラグアイへの日本人移住は20世紀初頭から始まり、農業開拓を目的として多くの日本人がこの地に渡りました。その後、言語や文化が大きく異なる厳しい環境の中で、農業を中心に生活を築き上げ、パラグアイの発展にも大きく貢献してきました。

そして2026年は、1936年に最初の日本人移住者がパラグアイへ入植してから90年という節目の年になります。現在では、日系パラグアイ人のコミュニティが各地に広がっており、首都アスンシオンをはじめとした地方の町にも日系移住地があり、約1万人の日系人が暮らしているといわれています。そこでは、子どもたちが日本語学校で日本語を学び、日本食や日本文化を大切にしながら生活しています。



【写真1：ラパス日系移住地の大豆畑】



【写真2：イグアス日系移住地にあるお寺“拓恩寺”】

私自身も、JICA海外協力隊の仲間とのつながりをきっかけに、日系の方々と交流する機会が増え、パラグアイで友人ができました。

日系地域を訪れると、日本語で会話が交わされ、日本食を味わうこともできます。地球の裏側にいるにもかかわらず、日本にいるような安心感を覚えることがあり、私にとって日系の方々との交流は“オアシス”のような大切な時間になっています。

特に印象に残っているのは、日系の友人のご自宅に招待していただいた時のことです。

食卓には、日本米や味噌汁、漬物、納豆など、日本で見慣れた料理が並んでいました。家族との会話でも自然に日本語が使われており、地球の裏側にいることを忘れてしまうほど、懐かしく温かい時間を過ごしました。



【写真3：日系の友人が用意してくれたお弁当】



【写真4：パラグアイの日本食レストラン】

関わりを深めていく中で感じるのは、日系の方々が日本というルーツを大切にしながらも、パラグアイ社会の一員として生活しているということです。

一方で、世代が進むにつれて日本語を話す機会が減り、日本文化の継承が課題になっているという話も聞きます。そのため、各日系移住地では、日本文化イベントや交流活動を通して、日本とのつながりを次の世代へ伝える取り組みが行われています。

例えば、夏祭り・冬祭り・運動会・カラオケ大会・日本食祭りなどが開催され、日本文化を次世代や地域の人々、そしてパラグアイ社会へ伝える活動が続けられています。

日本とパラグアイは、地理的には非常に遠く離れた国です。しかし、人々の交流や歴史、そして現在の国際協力を通じて、深くつながっている国でもあります。

私自身、パラグアイで暮らす中で、遠い国であっても文化や人とのつながりによって、心の距離は近くなることを実感しました。

機会があれば、ぜひ皆さんにも、この日本とパラグアイのつながりを感じていただけたら嬉しいです。



【写真5：8月にエンカルナシオンで行われた冬祭り】



【写真6：冬祭りでのやぐらと子供たち】



【写真7：6月にシウダーデルエステで行われた日本食祭り】



【写真8：イグアスの夏祭りで販売されていた駄菓子】



【写真9：3月にエンカルナシオンで行われた夏祭り】



【写真10：夏祭りでの鶴のオブジェ】

次回は、「日本とこんなに違う！パラグアイの日常生活」をテーマに、現地での暮らしについて紹介したいと思います。

¡Chao chao! 🙌